私たちと熊本の4年の歩み

～熊本地震現地ボランティアを通じて考えたこと～

関西学院大学ボランティア活動支援センター
ヒューマン・サービス支援室

【はじめに】

2016 年 4 月、熊本県熊本地方を震源とする大きな地震が発生しました。発生して間もなく、学生から「何かしたい」という多くの声がヒューマン・サービス支援室に集まり、学生が活動の中心となり募金活動を実施しました。

その後、募金活動だけではなく現地でボランティア活動がしたいという学生の声も多く、2016 年 7 月よりヒューマン･サービス支援室として「熊本地震現地ボランティア」の活動をスタートしました。この活動の特徴は、学内での事前打合せを通じて、参加する学生自身が現地での活動を企画することです。言われたことをやるのではなく、学生自らが活動内容を考えて現地で実施するということを大切にしています。

第 1 回、第 2 回の活動は被害の最も大きいと言われている益城町の避難所（益城町総合体育館）で行いました。第 3 回（2016 年 11 月）から第 15 回（2019 年 11 月）までは､仮設団地での活動を行いました｡仮設団地では集会所でイベントを実施した他、戸別訪問を通じて個人のお宅に訪問してお手伝いをする等、住民の方との交流を行いました。2020 年 3 月に予定していた第 16 回の活動は新型コロナウイルス感染防止対策のため中止となりましたが、企画実施のため準備していたものを使ってプレゼントを製作して郵送するなど、直接は会えない中でできることを考え実施しました。

この冊子は、2019 年度に実施した第 13 回から第 16 回までの活動に参加した学生が自分たちで内容を考えて作成したものです。ページごとに班に分かれて作成し、何を伝えたいのか､どの部分を強調するか等を考え､1 年間をかけてじっくり作成しました。思いの詰まった冊子になっていますので、最後まで読んでいただければ幸いです。

（2019 年度は 1 年間を通じて、益城町にある木山仮設団地・安永仮設団地・馬水東道仮設団地で活動を行いました。）

［第 13 回参加者］

［第 14 回参加者］

［第 15 回参加者］

［第 16 回参加者］

目　次

第 13 回熊本地震現地ボランティアの活動「あたたかさと笑顔」……P3
① 活動内容……P3
② 笑っている写真……P4
③ 1 人 1 人の感じたこと……P5
④ これからの支援……P6

第 14 回熊本地震現地ボランティアの活動「カラフル・ハートフル」……P7
① 活動内容……P7
② 前を向く 1 人 1 人感じた “ カラフル ” ……P8
③ 楽しモン！夏だモン！　……P9
④ ～傷跡と向き合って未来へ～　…… P10

第 15 回熊本地震現地ボランティアの活動「One Team」 …… P11
① 活動内容　…… P11
② One Team を感じるエピソード …… P12
③ 熊本仮設住宅の変化…… P13
④ 変わりゆく熊本～求められる新たな Team ～　…… P14

第 16 回熊本地震現地ボランティアの活動
「笑顔にはじけてご縁にトキメケ！！」…… P15

引率教職員メッセージ …… P17
おわりに　ヒューマン・サービス支援室 室長より　…… P18

第13回 熊本地震現地ボランティアの活動「あたたかさと笑顔」

住民さんが料理を教えてくださったり、貴重なお話をしていただいたことからあたたかさを感じ、活動しているときは私たちも住民さんも笑顔になれたことが印象的だったので、このテーマにしました。

馬水東道仮設

七夕飾り作り・茶話会

住民の皆さんと折り紙を使って七夕飾りを作りました。

なんでも屋さん

戸別訪問という形で、ご家庭のお掃除などお手伝いをさせていただきました。

木山仮設

コーヒー作り・ハンドアロマ

戸別訪問をして、コーヒーを目の前で挽いたりハンドアロマでリラックスしてもらいました。

安永仮設

おはぎ作り・茶話会

住民の皆さんと一緒におはぎを作りました。

第13回1班作成（神保、蒋、新井、住田）

久しぶりの再会で
笑顔がこぼれます

住民の皆様が温かく
迎えて下さりました！！

七夕に向けて
折り紙で飾り作り★

可愛い子供たちと
一緒に遊びました！

第13回2班作成（古原、村崎、小花、小谷）

1人1人の感じたこと

このボランティアに参加して、人のあたたかさを感じ、また熊本に行きたいと思いました。

仮設住宅を離れた後も多くの支援が必要だということを心に留めとかないといけないと感じました。

「私たち学生と話すことを楽しみにしている。本当にいつも来てくれてありがとうね。」という言葉をいただきました。

「今を一生懸命生きなさい。自分の軸をしっかり持ちなさい。」と住民の方からいただいた言葉を忘れず次につなげたいと思います。

戸別訪問をした住民の方が、帰り際にお別れを言うために集会所まで出てきてくれたことが驚いたし何よりうれしかったです。

一人の女性の笑顔を見たときや、その女性が作ってくれた料理を食べた時が印象的でした。

明るく前向きに進む仮設の方々との出会いに私たちのほうが励まされました。

「あなたたちがきっかけを作ってくれることで集会所に集まれる」と言ってくれたことがとてもうれしく自然と笑顔になれました。

御年99歳のおばあちゃんと娘さんの住宅に上がらせてもらい、ハンドアロマをしながら自身の話だけでなく、経験や戦争などとても貴重な話を聞くことができました。

「私はこの仮設に住む方に折り紙や工作を教えてもらって、手元が器用になった気がする！」とおっしゃっていて、仮設住宅の皆さんが自然と手を取り合って生活しているのだなと感じました。

ボランティアは、一緒に頑張る仲間や協力してくださる方のおかげで成り立っていると感じました。

ボランティアは私たちが一方的に何かするのではなく、お互いに相手を思いやって感謝しあえる時間だと思いました。

住民の方々は、毎日を大切にしようとしているなという印象を受けました。

今回のボランティアに参加し、1番感じたことは住民の方のあたたかさです。自分たちに何ができるのか不安だったけれど、お話をたくさんしていただきとても充実した4日間を過ごすことができました。

第13回3班作成（岡部、市野、廣瀬、間野）

これからの支援

熊本に行った私たちだからできる支援、
関西にいながらできる支援について
考えました。

熊本にもう一度行く

継続的な関係を作り、その時々のニーズに合わせたボランティアができる

発信する

現地の生の声、行ったからこそ知れた情報を周囲に伝える

被災地のものを買う

熊本県産の農産物や、くまモングッズを買うことで、熊本県の経済支援になる

募金をする

仮設住宅から引っ越しができないなどの、現地の金銭的な問題の解消に繋がる

第13回4班作成（菅、西原、津崎、大森）

第14回 熊本地震現地ボランティアの活動「カラフル・ハートフル」

“ 被災者 ” と一言にいっても、それぞれの経験やそこから生まれる感情は違う、という意味での “ カラフル ”。そして、私たち学生が同じことを見聞きしても一人一人感じ方が違う、という意味での “ カラフル ”。両方の意味を “ カラフル ” という言葉に込めました。さらに、今回の活動の全体目標に “kumamo to heart” とあったこと、そしてなにより熊本の方々のあたたかさが印象的だった、という意味で “ ハートフル ” としました。

1日目

断層見学 お宅訪問

語り部の永田さんから震災当時のお話を聴きました。

午後はグループに分かれて震災後に建てられたお宅を訪問し、お話を伺いました。

2日目

風鈴・風車・うちわ作り

住民の皆さんと楽しく作ることができました。

個性あふれる作品が沢山できました。

3日目

韓国風のり巻き・デザート作り

美味しくできて、住民の皆さんも喜んで下さいました。

抹茶立て・窓掃除

戸別訪問をし、たくさんのお話を聴くことができました。

第14回1班作成（今井、尾関、山口、濱口）

前を向く

～1人1人感じた“カラフル”～

『やりたいことをやってたら、少し大変でもがんばれる』。馬水東道仮設で頂いた言葉を胸に、学生としてできることとやりたいことを考えながら、私も頑張ります。

何か特別なことではなく、ただ子どもの成長を見守るだけでも前向きになるきっかけとなると感じ、普段当たり前の些細な事でも心の支えとなり得る事ができると知れました。

語り部の方が何度も「地震のおかげで」と仰っていました。起きた事実は変わらないが、その事実を自分がどう捉えるかは変えることができるということを学び、自分の心の在り方について深く考えさせられました。

一番記憶に残る言葉は「地震のせいではなく、地震のおかげで」でした。私もこれからの人生で、悲劇を迎えるのは確実です。その時、今回住民から学んだこの前向きの姿勢を思い出して克服したいです。

ボランティアとして役に立てるか不安でしたが、私たち関学生と「会えるだけ」「話すだけ」で笑顔になってくれる人や元気になってくれる人がたくさんいることに驚きました。震災から時は経ちましたが、前を向ける人ばかりではないことに気づき、仮設を出たから支援は終わり、ではないと実感しました。きっとどんな形であれ自分次第で関わり続けられるのだとも感じました。

ボランティアでありながら熊本の方々の“温かさ”に励まされていました。“辛い”ことがあっても、“前を向いて”生活している熊本の方々と繋がりを持つことができ感謝しています。

災害復興住宅が完成してきて、仮設住宅から出る人が多くなり復興が進みつつある一方、仮設住宅に残っている人の高齢化が進み、新しい問題も出てきていると実感しました。

震災からだいぶ経ってもまだ被害の爪痕は残っていますが、熊本地震を人に伝えようと動いている方や明るく前を向いて歩き出してる方々の姿がとても印象的でした。

前向き。それは望ましい姿勢だと思います。しかし難しいようです。訪問当日は仮設団地の内外から多くの方が来てくださいました。現地の方が前を向くきっかけにこの活動がなれればと願うばかりです。

おばあさんの髪型が整っているので、「素敵ですね。」と私が言うと、「ありがとう！80歳のおばあちゃんだけど、よく髪サロンに行きます。」と返してくれました。すごく小さなことだけど、髪型へのこだわりから、生活への憧れや追求が反映されていると思います。

地震当時「生きた心地がしなかった」と話す方が、今は元気に暮らしていらっしゃることが印象的でした。今この方が生きていらっしゃるから、私達はこの方に出会え、話を聞けました。私もどんなことでもポジティブに考えて生きていこうと強く思いました！

お宅訪問でお伺いさせてもらった家の方が、「九州北部で豪雨があったから泥かきに行くの」とおっしゃっていて、そのパワフルさに私が元気をもらいました。

常に元気でパワフルなお方でも地震の話をすると、『あぁその話をすると涙が出てしまう』と顔にタオルを当てている光景が印象的でした。良い意味で、地震の記憶を少しずつ忘れることができているのではないか、と感じました。それほど楽しい世間話に花を咲かすことができました。被災者の心の中に少しでも明るい色を染めていると思うと嬉しかったです。

前回、仮設を出て新しい家を建てた方を訪ねた学生から「新しい家は自分の家のような気がしない」と後ろ向きな印象の話を聞きましたが、今回私は同じ方のお宅を訪ねましたが、「自分の家をまた持ったのは良かったと思う」と仰っていました。そして震災を経験して価値観が変わった、とお話されていた時のお顔がとても晴れやかに見えました。

戸別訪問させていただいた住民の方で、震災後に再会したお孫さんが「生きていてよかった」と言って飛びついてきたことが何より嬉しいと言っていたのが印象的でした。

地震を前向きに捉える人も多く驚きましたが、中には「地震の時に身体を悪くしてしまったから、この先、生きていても意味がない」と仰った方もいました。しかし、そうであっても、話をしたり、触れ合っていく中で、何か前に視線を向けるきっかけになりたい、また、そうあることができていたらいいなと思いました。

第14回2班作成（大森、鈴木、孟、園田）

楽しモン！夏だモン！

今回のボランティアでは、「kumamo to heart ～楽しモン夏だモン～」を全体目標として活動しました。この目標には「熊本観光 HP に掲載されていない魅力を見つけることや、人とのつながり・楽しさ、heart の中身をつめていく」という思いが込められています。

戸別訪問。住民の方と風鈴の絵付けを行い、その音色で涼を感じることができました！

浴衣を着てお抹茶をおたてしました！連絡先も交換するほど仲良しに！

住民の方にかき氷を差し入れして頂き、一緒に食べました！一緒に夏を感じることができました！

優しいみんなと出会うことができとても大切な思い出になりました！

住民の方々とのお別れ。みなさん本当にあたたかく、お別れが寂しかったです。熊本での全ての出会いに感謝！

第14回3班作成（森永、田平、梁、下園）

～傷跡と向き合って未来へ～

知ったこと・感じたこと

- 自分で出来ることまでは援助しない方が現地の方の生活に張り合いが生まれるということ
  大変なこともあるけれど、できるだけ自分たちの力で復興していきたいという現地の方の思い

- 「震災のおかげで」と前向きに捉える人もいれば、体力的にも精神的にも衰えている人がいるため、一人一人の状況や捉え方の違いを理解し、丁寧に向き合うことが求められている

未来志向

- “震災のおかげ“で関われた新たな出会いを大切にしている

- いつかまた旅行するために足のリハビリを頑張っている

第14回4班作成（古原、吉村、野地、濱本）

第15回 熊本地震現地ボランティアの活動「One Team」

第 15 回の熊本地震ボランティアでは、全体テーマである「One Team フッと行動 もう一笑」を胸に活動をしました。その中でも特に One Team という言葉を、活動の中で実感することが多く、私たちの team にとって大切な言葉となっていました。
そうした私たちの感じた One Team を是非皆さんにも共有したいという思いから、このテーマにしました。

活動内容

安永仮設団地

クリスマスツリー型の飾り作りとフラッグ作りをしました。仮設団地の隣の空港保育園でも活動させていただきました！

木山仮設団地

窓ふきなどのお手伝いをさせていただきました。学生にとっては仮設住宅の現在の状況やこれからについて考えるきかっけとなりました。

馬水東道仮設団地

1日目

ラグビーボールを使ったゲームをしたり、季節の野菜であるサツマイモを使ったプリン作りをしました。

2日目

集会所でレンジで温める小豆を使ったカイロを作り、住民の皆さんに配布しました。動物柄の手ぬぐいが「かわいい！」と大人にも子供にも大人気でした！

第15回1班作成（小倉、吉原、植田、菅）

One Team を感じるエピソード

班活動中に

臨機応変にメンバーが動いてくれた

活動中にメンバーと円になって話し合った

みんなで力を合わせて班活動を乗り切った

住民の方にも気を配って動けていた

住民の方と

一緒に料理できた

写真を撮れた

「今日は本当にありがとう」と言ってもらえた

関わった時間が短くても濃い繋がりができた

メンバーに

フェリーでのミーティング後、全員が食堂に残って振り返りシートを書いていた

みんなで意見を出して、最後まで良いものにしようという姿勢を崩さなかった

みんなの何かしたいという思いがどんな形であれ必ず伝わる

第15回2班作成（後藤、島本、神保、佐藤）

熊本
仮設住宅の変化

仮設住宅に住む住民さんの数

周りに災害公営住宅などが建設され、ほとんどの住民の方々は転居された。そのため、集会所で行われるイベントに参加する住民の方がどんどん少なくなってきている。

関西学院大学と熊本の関係

過去にこのボランティアに参加したことがある学生がもう一度参加すると、学生の名前を現地の方は覚えて下さっていた。さらには個人的に手紙などで連絡をして繋がりを深めてきている。また仮設を出られても関学の学生が来るからという理由でイベントに来てくださっている。

気持ちの変化

震災から４年たつが、熊本の仮設住宅の方々は明るい方、神妙な面持ちの方など、震災からの気持ちの変化は様々であった。一人ひとりに寄り添う姿勢の重要性を学んだ。

第15回3班作成（山田、吉村、小谷、手納）

変わりゆく熊本
～求められる新たな Team～

安永仮設団地では、イベントの参加者は数人足らずで、集会所に集まる人はほとんどいませんでした。仮設団地の人口が減少していること自体は喜ばしいことですが、集会所に積極的に顔を出すことのない人ばかりが残っているので、残った人達同士の交流が減ってしまっているようです。そのことから現地の状況に合わせたボランティアの必要性を考えさせられました。

仮設団地の人口の減少 → 従来のイベント形式でのボランティアで良いのか → ニーズに合ったボランティアの必要性

例

仮設団地の集約（2020 年 3 月） → ニーズ：荷物の整理などが必要になるのでは

近年相次いで発生する自然災害による大きな被害は、3 年以上経つ熊本地震の印象を薄めているのではないか → ニーズ：熊本にも支えを求める声はまだ残っている。現状を鑑みて、熊本地震を風化させないために、私たちが熊本の現状を伝えていく必要がある。

第15回4班作成（泉、村崎、岡本、墨谷）

第16回 熊本地震現地ボランティアの活動「笑顔にはじけてご縁にトキメケ！！」

ここで出会えたご縁、ここではじけ溢れた笑顔、愛おしくてたまらない！
だからこそ、16 回メンバーは、熊本の皆さんにお会いできることを楽しみに待ち望んでいました…。何がどうなるか分からないこのご時世、だけどさ、みんなで笑顔にはじけて、ご縁にトキメこう！
これまでのたくさんの愛に感謝を込めて。届け！熊本へ！

安永仮設

私達は、安永の方と一緒にプリン作りをすることを企画していました。この企画にしたきっかけには、班員全員の「ほっこりした場作り」をしたいという思いがありました。また、老若男女問わずみんなに来ていただけるように、簡単に作れる物を選びました。

第16回参加者（西原、銭谷、大石、中村、植田、齊藤、丹羽、本田）

木山仮設

自転車を利用している方が多いと聞いたため、自転車のお掃除を考えていました。また、外で作業をしている間に豆から挽いた本格コーヒーを楽しんでいただきたかったです。

馬水東道仮設

1日目

1年後の自分へ手紙を書く企画は叶いませんでしたが、現地の皆さんとのつながりを大切にするために感謝の気持ちをこめて手紙を書き、写真立てを作りました。

2日目

フラワーアレンジメント！ 1人1つアレジメントしてみると、それぞれ個性とセンス溢れた作品に！職人のように真剣にアレンジメント、楽しかったです！

第16回参加者（山岡、中川、西川、濱本、盧、中前、魚谷、森）

引率教職員メッセージ

私が参加したのは、第３回までで、２回目までは避難所での活動でした。避難所での生活は仮設住宅以上に非日常的であり、そこでの活動を通じて皆さんは様々なことを思い、悩んだことと思います。その経験が、皆さんの中でプラスになっていたら、嬉しいです。また、関学生として、25 年前の西宮の状況も調べてもらえると嬉しいです。

（学長室　木村　己）

現地活動中はそばで見守ることがほとんどで、役には立てなかったけれど、奮闘する皆さんの姿や、継続する中で生まれてきた地域の方々との繋がりの様子を見て、職員として考える機会ともなりました。皆さんにとっても、これからの人生の中でずっと残る貴重な体験になると思います。

（学生課　益田　博）

学生同士で何ができるかを考え、試行錯誤しながら取り組んでいる姿を間近で見ることや、現地の方々から「関学の学生さんが来てくれるから、私たちも集るきっかけになり、ありがたい」という感謝の言葉をいただくことなどを通じ、災害発生後から、学生と教職員が一体となり、その時々に必要な支援をさせていただくことができていたのではないかと感じました。

（吉岡記念館事務室
村上芳秀）

ヒューマン・サービス支援室がほとんどの学生に認知されていなかった当時に「何かしたい」と学生の声が多く集まったことが今でも印象的です。このプログラムを通して現地の方々と学生がつながりを深めていく場面を多く目にしましたが、私にとってもたくさんの出会いや学びのあったプログラムでした。皆さんのこれからの人生にとっても、大切な経験や出会いになっていれば嬉しいです。

（ボランティアコーディネーター
成安有希）

住民の方々との会話やふれあいを通じて、少しずつ関係性が築かれ、お互いに「また会いたい」という声が沢山聞かれた活動だったことが印象的でした。学生の皆さんも感じていた通り、何をもって「復興」と言えるのかは考え続ける必要があり、「支援」はまだ終わりではないので、また皆さんとできることを考えて、行動に移していきたいと思います。

（ボランティアコーディネーター
岡　秀和）

おわりに

ヒューマン・サービス支援室 室長より

2016 年度 -2018 年度

室長　関　嘉寛

熊本地震では、学生たちからの何かしたいという声や自発的な活動を現地につなぎ、被災者の支えになることが大切だと考えました。そこで、現地でのボランティア活動を立ち上げました。

開設直後で何も分からない中、学内外からの多くの支援をいただき、活動が始まりました。はじめは避難所になっていた体育館での清掃作業などです。まだ被災地が混乱している時でしたので、受入団体との信頼関係づくりが重要になりました。しばらくして、仮設住宅に被災者の生活が移ると、被災された個々人との関係づくりに重きを置きながら、活動をしました。

東日本大震災でも被災地で継続的な学生活動を引率した経験から、学生みずからが考え、行動することを大切に、現地活動を行いました。参加した学生が、“ 自分発 ” で行うことで、被災者にとってより近い存在になり、それにより学生にとっても意義深い活動になると考えたからです。コーディネーターが学生たちを encourage しながら、準備や活動、ふり返りを行いました。そして、大学に帰ってからも、さまざまな発信を行いました。これらの活動を通じて 3 つの目標：「被災された方々を支える」「多学年・他学部の交流を通じて、新たな学びをする」「熊本地震の今を発信する」の達成を目指していきました。

2019 年度

室長　武田　丈

2019 年度の熊本地震現地ボランティアは、過去 3 年間と同じように継続してボランティアツアーを実施し、現地の仮設住宅でのさまざまな活動を通して住民の方たちと交流を図りました。私自身第 13 回の活動に参加し、学生たちとともに仮設住宅の方たちと直接交流し、これまで関西学院大学の学生たちと熊本の被災者の方々が築いてきた深い関係を実感させていただきました。その関係は、支援される側、支援する側という関係を超えた、人と人との間の信頼関係、お互いに学び、思いやり、刺激をしあうというものだったように思います。

こうしたさまざまな成果を上げてきた関西学院大学の熊本地震現地ボランティアですが、2019 年度の活動をもって一つの区切りとし、2021 年度に開催予定の、現地でお世話になった方たちの代表者を本学にお招きして、4 年間のこのプログラムの成果を検証して振り返るプログラムをもって、大学としての取り組みは終了します。しかし、今後は関西学院大学の学生たちと熊本の方々の間に築かれた強くて優しい絆をもとに、プログラムに参加した現役生、卒業生一人ひとりが、またプログラムには参加しなかったけれど活動の報告などによって影響を受けた現役生や卒業生たちが熊本での活動や、他の被災地における活動で、お互いに学び、思いやり、刺激をしあう関係を築いていってくれることを心より願っております。

発　行：関西学院大学ヒューマン・サービス支援室
〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原 1-1-155
上ケ原キャンパス正門左手 門衛室隣
☎0798-54-6061
✉kg.hsso.info@kwansei.ac.jp
2020 年 3 月